

# 染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報  
令和7年7月  
第 135 号  
毎月 1 日発行

## 断捨離

この言葉は、二〇〇九年に作家の「やましたひでこ」さんによって知られるようになり、今や一般語になりつつあります。

しかし初めて登場したのは、一九七六年に思想家の沖正弘さんが、インドのヨガの修行法を紹介する中に提唱された時だそうです。そして断捨離は仏教的な考えにも通じます。それは、単に物を捨てるだけではなく、その物に寄せる「執着心」を離れることが大切だということ です。執着心とは、例えば大掃除の途中にアルバムを見つけて、ひとたび開いたなら手が止まって作業がはかどらなくなる、アレです。モノには思いがいっぱい詰まります。

先日の七日参りでのことです。ご主人は自宅横に工場を立て、亡くなる直前まで働いていました。残されたご家族に家業を継ぐ人はなく、いずれは手放さなければならぬ物でした。

なんと、その工場の中の機械をもう手放すというのです。さすがに早まっていないか：わけを聞くと、ご友人が、お金のかかるこの作業を好意で引き受けた、ということでした。「建物だけは、物置として使うと良い」と助言も受けたそうです。

ホームページ



おて LINE



Facebook



奥様は「こんなに早くするつもりはなかったけれど、今この機会を見送ったら、いつになるか分からないし…」と、戸惑いと納得の入り混じったような口調で仰いました。話を伺いながら、私は自分の経験を思い出しました。母が亡くなって一年が経ったころ、スマホの買い替えの時に母とのメールのやり取りを間違えて全て消去してしまい、しばらく落ち込みました。

けれど一方で、母とは「思い出の世界」ではなく、出来れば「いったんお別れした後の、現在の関係」を大切にしたいという思いから、「あれはあれで、手放せてよかった」と思うようになりました。不本意なアクシデントがなければ手放せない私の中の執着心に気づかされました。

これから工場がすっきりしていく様子をご覧になって、奥様や娘さんたちは何を思うでしょう。

ご主人・お父様が遺されたものを通して、目に見えない大きなものを受け止められ、生きるということについて、それぞれに味が出て行かれるのだろうかと思ひながら、家を後にしたことでした。



「よろこびを 持ちて帰れば ほほえみて 待てるがごとし 君のうつしえ」(住職)

## いまさら仏教！



【成仏（じょうぶつ）】

いうまでもなく、仏教のゴール（目標）であり、私たち仏教者のミッション（使命）です。

成仏と聞きますと、つい「死」を連想されます。

たしかに、生前の苦痛や苦悩からの解放という意味では、それもハズレではありませんが、お釈迦さまは「生きている間にこそ求めたい目標」として私たちにお伝えくださっています。

だから、聖徳太子もこの仏教的精神を日本の国づくりの柱とするべく、「十七条の憲法」を立てたのですね。

その具体的な内容は「自分は本当に正しいといえるのか。相手の身になって考えてみる」など、自分の心と相手の心を見つめる生き方に現れています。おいおいお伝えします。

## ちょっと あたまの こりほぐし

10m先にある家は、だれの家？

★ヒント…単位を変えると見えてくるかもしれないよ



## おてらより

### お盆参り、いたします

日時：7/1から8/15までの間

順次お電話しておりますが、なるべくご希望に合わせたいと思います。ご連絡ください。

### お盆法要

日時：八月十六日（土） 十時～十二時

講師：当山住職

講題：「入道雲を眺めながめていたら、

この暑い時節に、先立っていった

人たちから生き方の再点検をする

ように言われた件」

### 施設訪問、出来る時に…

★縁あつて、現在二か所の施設の入居しているご門徒さんのところに面会に伺っています。面会、というよりも、楽しくおしゃべりに行くような気分です。もしご希望があればおっしゃってください。大変ありがたいです。

【①足を洗った水】

やくざな生活に見切りをつけて、まともな生活をすることを「足を洗う」と言いますね。これは、身に染みついた汚れやホコリを払って、人生をやり直すということから来ているのでしょうか。

ところで、お経の中に、「足を洗った水は、飲み水にはならない」という言葉が出て来ます。

ある日のこと、お釈迦さまをたずねて、一人の男の人が竹林精舎にやって来ました。最初に会ったのは、お釈迦さまの一人息子のラーフラです。頭を丸めていたというものの、まだ十二、三歳の腕白盛り。「お釈迦さまは、今どちらにいらっしゃいますか」との問いに、「この道をずっと登っていった霊鷲山です」と答えました。

霊鷲山というのは、お釈迦さまが、お弟子や信者の人々を集めて、お説教をなさるお山です。男の人は、ラーフラにお礼をいうと霊鷲山へと向かいました。その後ろ姿を見送りながら、ラーフラは、「ウフフ・・・」と笑いました。

その日、お釈迦さまは、霊鷲山ではなく、町に托鉢にお出かけだったので。「山に登ったら、誰もいないのでびっくりするだろうな」そんなラーフラのいたずらを知ってか、知らずか、ちょうどその時、お釈迦さま一向が托鉢からお戻りになったのです。ラーフラは、急いで水桶をお持ちしました。その水で足を洗われたお釈迦さまは、実に気持ち良さそうです。ラーフラは、そんなお釈迦さまのお顔を見るのが大好きでした。

ところがその後、お釈迦さまは、ちょっと厳しいお顔になって、こんな言葉を口になさったのです。

「ラーフラよ、そなたは、私の足を洗った水を飲みたいと思うだろうか」ラーフラはびっくりして「えっ」と聞き返しました。すると「おそらくはそうは思わないであろう。それなのにそなたは、悪意に汚れた言葉を人に飲ませてしまった」とおっしゃいました。お釈迦さまは、ラーフラのした行いをすべてお見通しだったのです。

ラーフラは、大声をあげて泣き出しました。「ごめんなさい。ごめんなさい」といつて泣いたのです。その大粒の涙が大地に落ち、土に吸い込まれて行きました。お釈迦さまは、その涙の落ちた所に、足を洗った水を流されました。「たとえ汚れた水でも、大地に戻れば恵みの水となるように、そなたの過ちも悔いの涙に清められ、心の糧となるであろう」こう諭されたラーフラは、それ以後、決して他人をからかったり、ウソを言ったりしなかったそうです。

足を洗うとは「心を洗う」ということなのです。ね。

【②ひとつかみの宝】

その昔、インドにたいそう慈悲深い王さまがいました。

ある時、王さまは、「布施行」を思いました。宝物を山と積んで、貧しい人たちに、一つかみずつ与えることにしました。

これを聞いた人々は、お城に押しかけ、それぞれに王さまから宝をもらっては、喜んで帰って行きました。

あるときそこに、一人の旅の僧がやって来ました。

「私も小さな家を建てたいと思って、宝をいた

だきにまいりました」

「そうか、遠慮せずに一つかみお取りなさい」そう王さまにすすめられて、喜んで宝を手にした僧は、なんと思ったのか、宝を元に戻しました。不思議そうな顔をする王さまに「申しかねますが、この一つかみの宝では家を建てるのがやつとで、結婚することまではできません。

いっそのこと、いただかない方が良いと思います」と言いました。

黙って聞いていた王さまは「では、もう二つかみお取りなさい」と言いました。

彼は喜んで取りましたが、またもや元に戻しました。

王さまは驚いて「まだ足らぬのか、では特別にもう七つかみ差し上げよう」と言うと、彼は感謝して宝をつかみかけましたが、またまた宝物を、元に戻してしまいました。

さすがに王さまもイライラして「まだ足りないのですか」と言いました。

すると僧は「はい、考えてみますと、家を建て嫁をもらい、田畑を買い、ぜいたくをしても、もしかといえば病気でもしたらどうなるでしょう。

そんな時にも安心できる財産がないと不安になります。

だからいっそ頂かない方が良いと思うのです」と言ったのです。

これを聞いた王さまは、ついに意地になって「私も一国の王、思いきって、この宝をそなたに全部差し上げよう。

それなら不安はないであろう」と言いました。

旅の僧は、じつと宝の山をながめていましたが、やがてくると向きを変えると、王さまに一礼を

してその場を去ろうとします。

「宝はいらないのか!」と叫ぶ王さまの声に振り返った僧は、「私は思ったのです。

どんなにたくさん宝物をいただいても、心の不安を消すことはできません。

欲を起こせば起こすほど苦しみは増すばかりです。

それならば私は、今の修行の生活のままで充分です。

人生は無常、先のことがかり思いわずらうより、今を精一杯生きることが大切だと気づきました。

私にとって、このたった一つかみの真理こそが、王さま、あなたからいただいた何にも勝る宝です。

王さま、あなたの人生にも、幸いと安らぎがおとずれますように」

こう言って静かに合掌をし、お城を去りました。私たちも、外の宝ばかりに心を奪われず、今日の

生命という、一つかみの宝を大切に生きていかなければならないでしょう。

(寺の友社ホームページより)